

埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻（中国思想）		学籍番号	06CS033
氏名	劉 莉	ローマ字	LIU Li	国籍 (留学生)	中国
修士学位論文名	各諸本『周易』における卦辞、爻辞「元亨利貞」考釋 —訓詁学、礼学の視点から				
提出年月日	2009年1月13日		指導教員	関口 順	
体裁 (論文)	54頁(1頁文字数1100字)		言語	日本語	
別冊添付資料等	図版・付表20頁				
キーワード	元亨利貞 饗礼 亨(享、亨) 殷末西周 祖先祭祀				
<p>本論文は、『周易』について、主として「元亨」という卦辞を再考することを試みている。それは、訓詁学・礼学という視点から、商末周初の祖先祭祀の変容という時代背景を考慮しつつ、全文検索可能なデータベースや電子古籍・電子辞書など、より効率的な検索方法を活用して行われている。</p> <p>まず先行研究の検討を行い、象数易学と義理易学における「元亨利貞」に対する注釈を整理し伝統易学の展開を把握した上で、近現代学者らが行った「元亨利貞」に対する注釈を比較し、近現代主流の解釈に対する疑問点を見出した。そして六書理論に基づく伝統字書の注釈方法・体系を把握するため、「元」「亨」両字の形・音・義から着手し、伝統字書における部首の分類、注音、解釈の仕方などを総合的に考察した。さらに、上海博楚簡本『周易』に見える「亨」と「卿」(饗)という両字の相違を焦点にし、まず、両字の前漢までの簡帛資料における用例を調べ上げて、両字の字形、字義の分化のプロセスを考察した後、『詩経』と『周礼』における両文字の用例も分析した結果、「亨」(亨)とは本来専ら先王(人鬼)を祭祀する時使われる動詞で、「饗」とは本来王と関係する「饗礼」を意味することが分かり、『周易』における「亨」も本来「饗」に作り、「饗礼」の義で、卦辞「元亨」の本義は「大饗の礼」という意味であることが分かった。</p> <p>伝統文献における「饗礼」に関する記述には矛盾点があり、古文字学者・考古学者の見解もそれぞれ異なっている。現時点で推定できたのは：甲骨文の研究を通じ発見された周祭五祀とよばれる商の末期の祖祭の体系が、一巡するのに一年を要すること。また、祭祀の前、必ず占トが行われるが、その占問の結果は吉かあるいは大吉か一律であること。周祭が当時の一種の歳時を記録するシステムとして、固定した順序で繰り返し行われたということ一である。この歳時と強く関係する祭祀文化はのちに周人に継承され、さらに商の「帝」の信仰は「天」と結びつき、人間と「天帝」を繋ぐ「徳」という理念が提出された。人間の「徳」によって「天命」が下される。「徳」を持つ人間でないと「天帝」の加護と賜福をもらえないという。</p> <p>これらの考察の結果は以下の通りである。商末から西周にかけて、周祭の一環としてのト筮活動は、後に民間に普及し、今日まで様々な変質を遂げた占いととは全く違うものであった。当時のト筮を含め「饗礼」のような一連の儀礼は人間と天神、地示、人鬼とを疏通する手段であり、「徳」、「儀礼の正しさ」が要求されている。したがって、当時の祭祀文化の視点から見れば、「元亨利貞」に対する現代学者らの「ト筮用語」としての解釈と、伝統経学家らの「四徳」としての解釈は決して矛盾しているわけでもない。</p>					